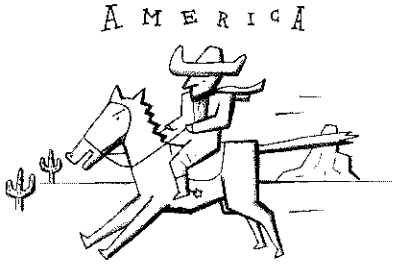
特集 海・外・に・学・ぶ

最新おんがく教育事情みてある記

急速な進歩を遂げた日本の音楽教育。さて，外国は？　今月は，海外での状況等を5人の先生からご報告いただく。アメリカ，オーストリア，ソヴィエトと，注目に値する国々ばかりである。

USA



アメリカ

1 The New School for Music Study

日本バスティン研究会会員
田村智子

この指導者養成学校（ニュージャージー州立プリンストン）でピアノ教育学と実施レッスンを学んだのは3年前。グループ・個人レッスンをしていて，どうしても，もう1度教え方の総点検をしたくて再び訪れました。《ミュージック・ツリー》は全音から出版されていますが，このシリーズは全部で25巻あります。残念ながらこのメソード，使い方があまり知られていないため，日本では眠っているようです。私も実際，学校で使い方を勉強するまでは，分からないところがありました。しかし今，またさらに《ミュージック・ツリー》に惚れなおしています。するめみたいで，使えば使うほど奥があります。

N. S. M. S. にやはり来てよかったと思うことは，たくさんありました。そのひとつは，レッスン・プランについてでした。今までの私は，ここでAが出てきたらAを教える――つまり，本に添ってページを1枚ずつ進んでいました。ところが，N. S. M. S. では，Aを教える以前からAを少しずつ紹介しておき，生徒がなじみになったところで，Aはかくかくしかじかである，と教えますので，血肉となって吸収されます。おおまかに10週間のレッスン・プランが作られ，それをさらに毎週より細かく練ります。曲もかたよらないよう配分されます。グループ・レッスンでは大きな項目（テクニック，楽典，新しい曲，復習，聴音，リズム，創作，音楽史，etc.）を立て，何を主にするかは，生徒の反応，性格，弱点を考慮して決めます。音楽ゲームも多く採り入れられています。

個人レッスンでもさまざまな発見をしました。例えば，5指の位置で黒鍵が含まれている場合，黒鍵を弾く指か

◀ユージニー・ロシェール女史

◀シダーハーストにて。左よりホロヴィッツ、ゴードン、筆者、ステッカーの各氏

▲NSMSの庭にて

▲NSMSの庭にて

ルイーズ先生と▼

▶NSMSで生徒に囲まれて

ら準備（手首，指ともに上からポイント）して，だんだんピアノを弾く位置まで下げます。これは，曲の中に♯♭などが出てきたときに前もって黒鍵を弾く準備ができ，つねに意識するようになり，手の形も整います。もうひとつは，Tap and Countで曲のリズム，アーティキュレイションを，ピアノの蓋の上で数えながらたたきます。右の音符は右手，左で弾くリズムは左手です。ピアノを弾く形でスタッカート，スラーなども意識してタップします。

他にもまだまだ多くのレッスン法がありました。午前中の教育学でも，スローランナー（落ちこぼれ）対策や音色と指の関係について，熱のこもった討論が繰り広げられました。

この学校とは別に，ステッカー・アンド・ホロヴィッツ（ニューヨーク・シダーハースト）の学校へ，《キーボード・ストラジティ》という本の勉強に行きました。これはまだ日本語に訳されていませんが，楽典を即興演奏とともに学ぶ，たいへん良い本です。この学校にはピアノだけでなく，管・弦楽器のコースもあり，年少から室内楽などの勉強もできます。

最後に訪れたのは，作曲家ユージニー・ロシェロール先生（コネティカット州ウィルトン）のところです。先生は3人の息子さんを育てながら，ピアノ曲のみならず，室内楽曲，合唱曲，オーケストラ曲等，多くの作品を書いていらっしゃいます。先生は作品について説明されたあと，こんなことをおっしゃいました。

「多くの先生方は，家事に追われて音楽を勉強する時間がない，と言って音楽から遠ざかりました。でも私は，それは家事を言いわけにしていると思います。私だって息子の野球やフットボールの応援だとか，学校のバザーだとか，数限りなくあります。でも，私はほんとうに音楽を勉強したかったから，1日に5分の時間を見つけ，それをその次には10分に，というように，徐々に要領よく用事をすませる工夫をしたのです」

微笑みながらおっしゃる先生を見ながら，私も音楽が大好き！　と心の中で叫んだのでした。

Austria

オーストリア

2 手づくりの音楽研修の旅

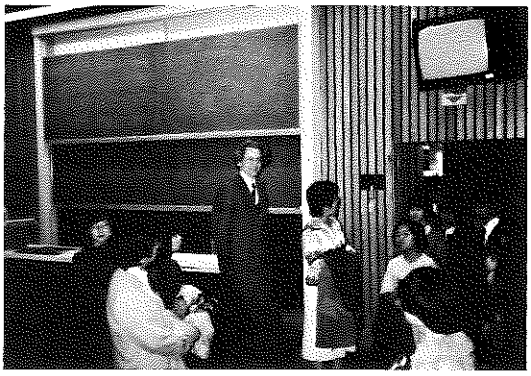
札幌ピアノ音楽院院長
宮澤功行

私は，自分の考えている教育的な夢を実現するために，4年程前から小さな音楽教室（札幌ピアノ音楽院）を主宰し，ピアノ音楽を指導・育成していくうえでのさまざまな試みを，積極的に実践してきました。このたびのヨーロッパ研修旅行もその一環として企画されたもので，

多分に実験的な面もあり，反省すべき点も多いのですが，結果を恐れずにひとつの目的を持ってその実現に向けて情熱を傾けてみること。そして，その繰り返しが生徒たちに有益な何かを与え続けてきた事実を確認し，実行してみました。当音楽院の若い講師たちには，とにかく，まだ行動力も内的エネルギーも旺盛なうちに，外に向かって投げかけていけることはなんでも実践していこう，という意識があり，その活力が日常のレッスンも含めて，私たちの音楽活動を積極的なものにしているわけです。

3月25日，われわれ一行27名は，ルフトハンザ航空北回りの便でデュッセルドルフへ到着。ただちにオーストリア航空機に乗り換えて，ウィーンへ向かいました。ウィーン到着後は定石どおり市内観光。私は，昔，妻が留学した際にお世話になった，ウィーン・コンセルヴァトワールの元学長エルヴィン・ヴァイス氏を見舞いに郊外の病院へ。同行の山下先生は，以前私どもの音楽院へいらしていただいた香港のピアニスト“メロディ・ウー”嬢が，スイス郊外の私立音楽院で教えておられるとの連絡から，視察を兼ねてスイスへ向かいました。夜は，ホルスト・シュタイン指揮，アームストロングがタイトル・ロールを歌う，R. シュトラウスの歌劇《サロメ》を鑑賞。はじめてウィーン国立歌劇場へ来た生徒と教師たちは皆，心から感激していました。しかし，私には以前の演出のほうが素晴らしく思えたし，サロメの妖艶な踊りの場面では，前回はバレリーナが歌い手に代わって踊っていたのを，今回の公演ではアームストロング自身が踊ったものだから，オーケストラ・ピットの中からウィーン国立歌劇場管弦楽団の奏者たちが，演奏しながらうしろを見てその踊りを鑑賞しているのを，なんともいただけないなと思ったり，それにしてもよくうしろを見ながら演奏できるなあ，などと感心したりしていました。それでも，久しぶりのウィーンのオペラと，ウィーン・フィル（ウィーン・フィルのメンバーは全員ウィーン国立歌劇場のメンバー）の音には酔ったものです。

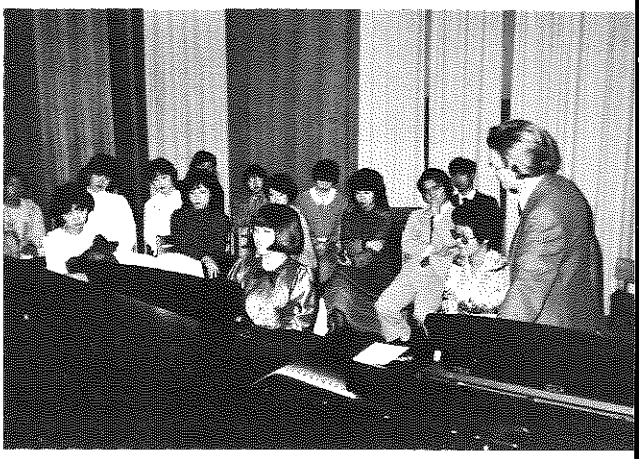
翌26日は型どおり，シューベルト，ベートーヴェン，



▶ザルツブルク音楽院内をランゲ教授にご案内いただく

ハイドン等の記念館，中央墓地等を見学。自由行動のあと，私はリッカルド・ムーティ指揮・演出のヴェルディの歌劇《リゴレット》を鑑賞。これはムーティが原典版を使用し，新しい演出による，ということで，ウィーンの人々の話題をさらっていたものですが，その初演の批評は最悪。カーテンコールの際には，ムーティに対してブーブーと盛んにヤジが飛んだとのこと。そんなわけで多少心配はあったのですが，どうして，どうして，この晩の《リゴレット》は秀逸でした。とくに，ジルダ役のグルベローヴァとリゴレット役のバス歌手には，心から魅せられてしまい，早くもこの2日間で大きな収穫を得た感がありました。

思えば，このウィーンは，妻が留学生として滞在していたころと少しも変わっていません。いつ来ても，大人の落ち着きと渋さを持ち，都市の成熟といったものを感じさせずにはおかない，不思議な魅力を持った街だと感

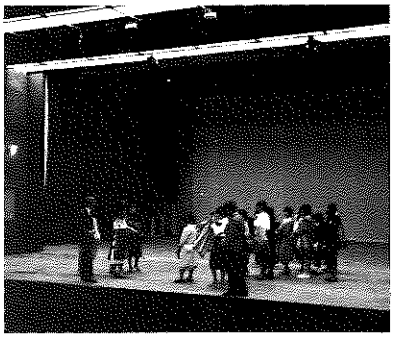


▶レッスン風景

心させられてしまいます。この街を散歩してから，シューベルトやモーツァルトを聴くと，その音楽がこの国の自然と民族性を表わしていることがよく分かりますし，ベートーヴェンでさえも，この国で聴くとオーストリア民謡のように聞こえてきます。シェーンブルン宮殿の裏庭にあるグローリエッテを右手に歩いて行くと，ヨハン・シュトラウスⅡ世が《こうもり》を書いたヴァイダリッヒ・ガッセ（＝ヴァイダリッヒ通り　ウィーンの発音では，ワイダリッヒ・ガッセとなり，イントネーションが柔らかくなります）に出て，通りに面してアメリカ大使館があります。

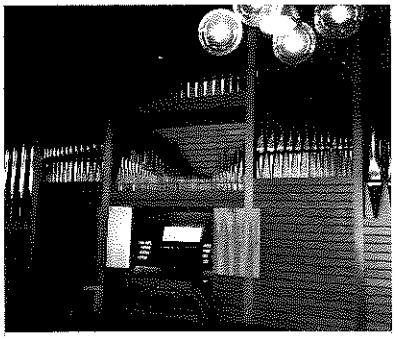
いまでも，ハイドンやシュトラウスに会いそうな気がするこの辺の街角を，昔よく散歩し，オペラに通ったことなど，思い出つきないウィーンをあとに，一路ザルツブルクへ。当地には，学生時代からの親友で同門の前島園子さんが，現在ザルツブルク音楽院教授として活躍中であり，このたびは，私たちのためにひとかたならぬ尽

▼新校舎の大ホール



▲教授会室

▼新校舎の小ホール(パイプオルガン)



▶レッスン風景　右端が通訳もしてくださった前島園子女史

力を賜りました。カラヤン・フェスティヴァルやフリードリッヒ・グルダのピアノ協奏曲の夕べ等のチケットの手配から，ザルツブルク音楽院における，ペーター・ラング教授のレッスン，講座のスケジュールに至るまで，実にきめ細かな心温まる配慮をしてくださいました。そのおかげで，ほんとうに充実し，実り豊かなザルツブルクという感想を，われわれ全員が持てたということを，いまさらのように感謝し，ありがたく感じています。

ラング教授の講座の初日には，教授自らザルツブルク音楽院内の各教室，施設を案内してくださり，レッスンのほうも，3日間，朝10時から夕方6時まで，みっちり行ってくださいました。ラング教授のレッスンでとくに注目したいのは，主任教授の要職にありながら，その若さ（36歳）と，レッスンに対する熱心さ，モーツァルトにおける生き生きとした解釈などです。何事にも頑固なまでに保守的な体質を持つこの国で，国立音楽大学の主任教授がこのように若く，意欲溢れる音楽的エネルギーを発揮できる環境を持ち，周囲もその才能を認め登用していくといった姿勢に，こと音楽に対しては並々ならぬ決意を示す国なのだ，という事実を知り，改めて感心させられました。

レッスンでは，近年ミュンヘンの音楽家たちのあいだで，人間モーツァルトとして，また，マンハイム楽派として，モーツァルトの音楽を考えなおしていこうという機運が高まっており，地理的にミュンヘンから近いうえに，モーツァルトの生地でもあることから，その解釈には注目していました。期待どおり，その人間味溢れるドラマティックな解釈は，日本でふつうに聴くモーツァルトとは違って変幻自在で生々しく，しかも自由で自然といった，モーツァルトの実像を鮮明に浮かび上がらせてくれるものでした。ラング教授には，そのうちぜひ日本にいらしていただき，演奏とレッスンとで，私たちによい影響と本場の魅力を与えてほしいと思いました。

夜は毎晩いろいろなコンサートが開かれており，カラヤン・フェスティヴァルの期間中でもあったことから，たいへん恵まれた演奏会スケジュールでした。なかでもカラヤン指揮・演出のワーグナー《さまよえるオランダ人》には皆，驚いたようです。室内楽を聴いたミラベル宮殿も，グルダのピアノ協奏曲を聴いたモーツァルテウム・ザールも，会場そのものが持つ雰囲気と響きが素晴らしく，生徒たちも，日本で聴くコンサートとは全く別の感慨を持ったようです。レッスンも含め，ほんとうによい勉強になったと思います。

タイム・マシーンに乗って，突然私たちの前に姿を現わしたようなこの都市のすべてに感激し，その後，フュッセン，ミュンヘン，ロンドン，コペンハーゲンを観光最終日，コペンハーゲンを発つときには，皆口々に，

「まだ日本へ帰りたくない」

と言い出したほどです。

「まだ若いから，きっとまた来られるよ。帰ってまた一生懸命勉強しよう」

などと慰めて皆を見送り，私たち家族はスウェーデンへ向かいました。

こういった研修旅行も，札幌ピアノ音楽院としては2回目，通算4度目になりますが，今回もまた，大きな収穫を私たちにもたらしてくれたようです。この種の企画も他人任せなら楽なのでしょうが，すべて自分で計画し，実行していくには，精神的負担はもちろんのこと，意識改革に時間がかかるうえに，その実現までに膨大なエネルギーと忍耐力を必要とします。しかし，私たちの

考えている教室作りの第一歩として，この成果は何物にも変えがたいものです。

ピアノのレッスンというと，とかく個人的（カリスマ的）で閉鎖的になりやすく，その弊害はこの“わたくしたちの音楽”誌でもよく論じられているとおりだと思います。私たちピアノ教師が子どもたちに教え，上達へ導く際に，自身の経験と実践がなによりも役立つわけですし，その結果として子どもたちが伸びていくことができるのですから，ピアノの先生はつねに自分を磨き，その考え方の世界を広げていくよう，努力していかなければならないと思うのです。

最後に，こういった有意義な活動が，全日本ピアノ指導者協会のような立派な活動を行っている組織を通して，全国のレスナーや音楽に対して前向きな個人の方々にも広がっていったら，素晴らしいことだと考えています。今回の研修旅行中に，私の目指すところのものと，ピティナの活動・理念が似ているように思えました。

北海道に住んでおりますと，ピティナの活動はとてもよい刺激になります。とくにコンペティション課題曲の選択が素晴らしく，何年か続けて勉強していくと教える者としてもレパートリーが広がり，教える材料も豊かになると思います。

今年度のピティナ・ヤングピアニスト・コンペティション北海道決勝会に，札幌市長賞と教育長賞が設けられることになりました。こうしたことを契機に，ピティナがより社会的に幅を広げ，発展していくことを期待します。

3 海外留学のために

ウィーン国際音楽
ゼミナール協会副会長
佐藤喜美子

今冬のウィーンは1775年以来はじめて（208年ぶり）の暖かさで，私たち日本人にとっては，1日中零下が続きすべてが凍りついてしまう厳しい寒さでないことが，とてもうれしく思われます。しかし，新聞によると，この異常暖冬の長所は燃料費が節約できることのみで，非常に多くの人が病気になったり，疲れを訴えているようすです。毎日，平年より20パーセントも多く救急車が出動しているとか。心筋梗塞，循環機能の病気，気管支炎，それに憂鬱症からの自殺，不注意から起こる自動車事故等が続発しているのです。加えて，スキー場は雪が少ないため，当初あてにしていたスキー客も大幅に減少して困っているとか。その暖かさも2月に入っていくぶん薄らぎ，少しは冬らしくなってはきたものの，それでも例年に比べれば暖かいとのことです。もちろん，暖かいといっても雪が降り，気温は零度から2度どまり。異常な暖かさに喜んで咲き出したかわいい雪割草や桜草が，寒さにかじかんで凍えています。杏などの樹々も若芽がふくらみ，つぼみもちらほらしていましたのに，かわいそうに凍えています。

そんなころ，ちょうど大学は2週間のゼメスター（学期）休暇，小・中・高校は1週間のエネルギー休暇に入ります。エネルギー休暇というのは，エネルギー節約のために考え出された休暇で，いちばん寒い時期に学校を1週間閉鎖し，暖房用エネルギーの節約を計ろうというものです。

さて，ウィーンは「世界の音楽の都」だけに，毎年700人前後の日本人音楽留学生が当地に学んでいます。昔はウィーン音楽アカデミーとよばれていた現在のウィーン国立音楽大学1校だけでも，競争の激しい入学試験があるにもかかわらず，ゼメスターごとに250人の日本人が在学しています。私が留学したのは1961年ですが，当時は1学年に日本人はたったひとりしかいなかったことを思うと，まるで夢のようです。

多くの人たちが若い時代によい環境で勉強できることは，たいへん素晴らしく，恵まれたことでもありますが，人数の増加と同時に，ここ2，3年いろいろな問題が出てきています。現在の学生は幸せなことに，日本の国が世界の中で経済的に大きな力を持つようになったため，20年前の私たちが理屈ぬきに抱いていた多少の劣等感のようなものも，ほとんど持たなくなりました。これは幸せなことではありますが，しかし日本が経済的に力を持てば持つほど批判されるのは，その人間性，そして精神においてなのです。これまでは日本を自分たちより劣っている国，力の弱い国と見て哀れみを持ち，欠点やいやな面も大目に見てくれていました。それが自国より経済力を持ち，ひいては自国の経済をも脅やかす存在となったいま，そうした甘えは許されなくなり，そこに問題が生じてきているのです。それだけ対等に見てもらえるようになったことは，ほんとうは喜ぶべきことなのですが。

日本のみならずこちらでも，戦後生まれた若い人たちの考えと，それ以前に生まれた人たちのそれとのあいだ

1．担当地区の警察署に**在住届け**をウィーン到着後3日以内に届けること。また，ウィーンを去るとき，あるいは住んでいるアパートを出るときは，**必ず届け出を引き出すこと**。その際はパスポートが必要。届け出書き(MELDEZETTEL)はTABAKで購入できるので，必要事項を記入し，大家さんの署名をいただいて届け出る。

2．日本大使館の領事部（1040 Wien, Argentinierstrasse 21）で**滞在届け**を提出すること。届け出がない場合，日本大使館はいかなる連絡も取ることができない。また，ウィーンを去るとき**届け出を引き下げること**。

3．**滞在ビザ**の切り替えに注意すること。人や地区によって期間が少し異なるので，よく気をつけて，注意を受けないよう手続きしよう。

生活一般について

1．外国に生活するときは，本人の意志と関係なく外国人（日本人）として見られ評価されるので，日本人として恥ずかしくない生活，行動をとろう。

2．習慣，言葉の違いから誤解を招くことがあるので，あくまで外国人（日本人）として外国に住むのだから，現地の人たちと摩擦が起きないよう努力しよう。「ありがとう Danke schön」の言葉が使えるように。これはお世話になったり親切にしていただいた日本人に対しても同じこと。また，**ウィーンを去るときにはお世話になった方方にご挨拶をして去ろう。**

3．外国生活での孤独感や不満感等から，お互い日本人同志のおしゃべりで他人の悪口を言ったり，足を引っ張るような愚かなことはやめよう。

4．若い年代はもちろんのこと，大人でもひとりでの外国留学生活は決して生易しいものではない。しかし，何のためにウィーンに留学しているのか，それぞれ自分で目的と意義があるはずなのだから，それを見失わないように伸び伸びと豊かに勉強しよう。

5．先生やお世話になる方々に対しては，とくに人間としての礼儀を守ろう。外国人の先生は格式張らない方が多いが，ちゃんとよく見ておられるので，きちんとした態度をとろう。

6．電車の只乗りはやめよう。「見つかったら罰金を払えばよい」という考えは間違いである。日本人としてそこでも見られるので，他のちゃんとした日本人に迷惑がかかることを忘れないように。

7．新聞の盗み取り（日曜・祭日に路上に置かれている）はやめよう。人間を信じて置いて売っているものを盗むことは，その信頼を裏切ることになる。

8．共産圏やアラブ諸国に比べたら，種種の点で全く恵まれているオーストリアで勉強できるありがたさを忘れないようにしよう。例えば，学校の授業料は現在1名1年間約3000シリングだが，実際にかかる経費は1名1年間約17万シリングで，その差額はオーストリア国民の税金によって支えられている。また，オペラの入場料等も，実際の経費は切符代の2倍はかかっており，その差額もオーストリア国民の税金でまかなわれている。

9．若いお嬢さんが男性から道で声をかけられたときは，きちんとした態度をとろう。夜などは気味が悪いと感じたら，返事をする必要はない。

10．一部の例外を除いて，皆さんひとりで外国生活をしているわけだから，自分のことは自分でしよう。もちろん，お互いに仲良く助け合うことができるなら素晴らしいことだが，考え方の根底に，他人に迷

留学のしおり

惑をかけてはいけないという意識を忘れないようにしよう。

11．医療費，薬代は高いので，「健康保険」を入手するとよいだろう。日本で，外国でも通用する保険証を持っている人は，毎年それが有効になるよう手続きすること。ウィーン国立大学(Hochschule）では学生保険証が入手できるが，他の学校では不可能なので，プライヴェートの健康手帳をすすめたい。

アパートについて（Wohnung）

1．アパートは清潔に保つこと。

2．アパート代は毎月決められた日に納入すること。その場合，必ず支払った証拠として書式の受け取りを入手すること。銀行振替の場合，収めた振替書を保存しておくこと。問題が起こった場合，書式のものしか通用しない。

3．たとえ2～3日でも，留守にする場合は大家さん，あるいはそれに代わる信用できる人にその旨を届け出ること。また，留守中の連絡先を伝えること。万が一，留守中火災や盗難，あるいは工事等でアパートに入室しなくてはならない場合も考えられる。

4．自分の過ちで家屋または調度品を破損した場合は，必ず大家さんに申し出て，その費用を支払うか，あるいは話し合ったうえで代品を自分で購入する。

5．大家さんから借りたアパートに，他の人を許可なく泊めてはならない。1晩か2晩なら大目に見てくれるが，それ以上長いときは必ず大家さんの許可を得ること。大家さんは借りた当人にアパートを貸したのであって，それ以外の人に貸したのではない。ただし，自分で家を購入して自分のものとなった場合は別である。

6．ピアノの練習や，歌，楽器の練習で近所，隣と争いが起こらぬよう充分注意する。入居する前に許可を得，その後も近所，隣の人たちと仲良くすることが，問題を起こさぬ根本条件のひとつである。練習の約束時間は必ず守ること。ウィーン市の法律では一応，朝8時から夜10時までは音を出してよいことになっているが，常識として昼休み（12時～14時）は休むこと。また，それぞれのアパートによってこの練習時間の条件は異なるので，入居する前によくその条件を確かめてから入居すること。気をつけて，気持ちよく練習ができるようにしよう（できたら，契約書にその点を明記するのがよい）。

7．郵便箱に「電報」が入っているときは，その旨を知らせる小さな紙片が貼られているので，必ず開けて入手すること。「速達」も同様である。

8．「書留」は，留守のときは必ず郵便局に取りに来るよう記載した紙片が，郵便箱かアパートのドアに入れられているので，指定された郵便局，日時に取りに行くこと。そうでないと返送されてしまう。

9．アパートを出るとき，借りていたシーツ等，クリーニングに出して借りたはじめと同じ状態できちんと大家に返す。清掃するのはいうまでもない。**冷蔵庫の中も「霜取り」**をし，電源を切ってすっかり掃除しよう。壊れたものがあったら，大家さんに話し精算しよう。借りているあいだはもちろん定時に支払うこと。止められると大家さんが大迷惑する。**ガス代，電気代，電話料金**等も，大家さんに迷惑をかけないようきちんと精算すること。

10．アパートを出るとき「鍵」を必ず返そう。鍵を持っていることは，借りていることである。

11．ガス代，電気代，電話代，ピアノ借用代，すべて払ったものは必ず**書式の証拠**を保存しておく。

には多少のギャップが見られますが，日本人の場合には際立って特徴的な点があります。それは，戦後アメリカから入ってきた自由主義思想が，日本では誤って勝手主義と解釈されてしまったのではないか，と疑わざるをえないような事態が多々見られることです。言いたいことを言い，やりたいことをやっていながら，それに対して「責任」を持たない人があまりにも多すぎます。そのため，以前から時たまあったことなのですが，日本人留学生の生活，勉強態度に対するこちらの人々の嘆きの声，不満の声が，最近とみに大きくなってきているのです。きちんと整えてくれたアパートを，掃除もせず，調度品を破損しても知らん顔で帰国してしまう人。勝手に室内で動物を飼い，壁や床を台無しにしたまま帰ってしまう人。電話，ガス，電気といった公共料金を未払いのまま帰国してしまう人。数えあげればきりがありません。また，先生方に対する態度にも大きな変化が見られます。国立音楽大学のある教授がおっしゃった，

「ひと昔前の日本人と，現在の日本の若い人たちとではずいぶん大きな違いがある。だから，われわれも接し方を変えなければならなくなった」

という言葉が，現状を如実に物語っています。

こうした嘆きや訴えは結局，現地に長く住み，若い人たちの面倒を見ることのできる，ごくわずかな日本人年長者のもとへ持ち込まれ，あと始末をさせられるわけで，大使館はいっさい助けてはくれません。

そこで私たちは，これが果たしてどれだけ効果を発揮するか疑問ではありますが，「留学生活に必要な心がまえとその具体的な注意」を書き出した『留学のしおり』を，学生に渡すことにしました（8頁参照）。そして，若い人たちの良心に，祈るような気持ちで期待しております。もちろん，なかにはきちんとした生活を続け，真剣に学んでいる人たちもいます。こういう人たちに出会うと，私たちも嬉しく，救われる思いがします。また，そうした良き日本人しか知らない人たちは，日本人をとても誉めてくださいます。が，その数は年々減少する一方で，この種の問題が日本人同志のあいだでも起こりはじめたのです。

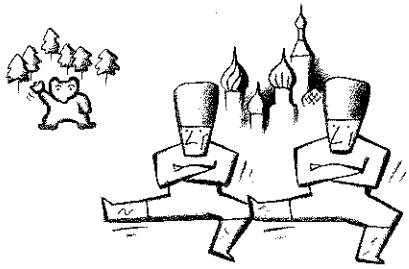
「経済摩擦」が社会問題として採り上げられています。いまこそ，民間の良き人たち（日本人，外国人を問わず）の嘆きを取り除き，無責任な人間をひとりでも減らす努力を惜しまないことが重要なのです。

本来ならば，こうした問題は親が正しく認識し，子どもにしっかりしつけてから，ウィーンなり外国なりへ行かせるべきなのです。戦後の甘やかし，すなわち，厳しいが愛情のこもった躾を怠ったつけが，いま国際問題という形でまわってきたと考えるべきでしょう。

夏の2か月，クリスマス，復活祭を除き，ウィーン国立歌劇場ではつねに公演があり，各演奏会場には世界でも有数のプレイヤーが登場します。そんなウィーンの街で生活することほど，音楽を愛し学ぶ者にとって幸せなことはありません。学校へ支払う授業料は，1年間でひとり約5万円ですが，実際には250万円もの経費がかかっているのです。ではその差額がどこから出ているかといえば，それはオーストリア国民の税金からなのです。ウィーン国立音楽大学1校だけでも，3億円以上の額が日本人に与えられているのです。そういったこの国の好意を決して忘れてはなりません。

いまや世界の経済大国といわれている日本の国民のひとりとして，人間としても国際的に通用し，愛される，そして世界の平和と幸せに少しでも貢献できるようになりたいものです。

USSR



ソヴィエト

4 ソヴィエトのピアノ教育に思う—ピアノ教育視察に参加して

東京女子体育大学助教授 山岸麗子

私は，今年3月末から4月のはじめにかけて，わずか11日間の日程でしたが，キエフ，レニングラード，モスクワの音楽学校を見学し，小学校から大学までの演奏やレッスン風景など，充実した教育のようすに接することができました。ソヴィエトでは授業料はすべて無料で，これは音楽ばかりでなく，すべての分野に共通しており，次の時代の担い手である子どもの教育，才能発掘のために，国家がいかに力を注いでいるかが窺えます。子ども

▲モスクワ第3芸術学校にて

▲マリーナ先生と話す筆者

▲マリーナ先生のレッスン風景

たちの躾もゆき届いており，校内暴力など全く無縁の世界に思われました。平均気温マイナス4度という覚悟で行ったところが，たまたま100年来の暖かさに見舞われ，旅行中16度から18度の気温に汗をかき，防寒具をもてあましておりました。

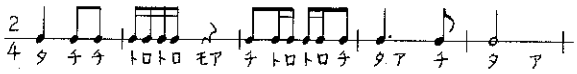
ソヴィエトでのピアノ・レッスンのあり方などを見せていただいて，全体に感じたいちばん大きなことは，一にも二にも音楽，「歌って弾く」ということを根本に置いて指導している点でした。ごく初歩のレッスンでも，表情に富んだ音色をピアノから引き出せるようにと，先生は非常な努力を払っているようでした。

ピアノのテキストには，音楽への愛情を子どもの心によびさますように，古典から現代に至るあらゆる種類の質の高い音楽が選ばれており，難易度を吟味して学年別に作られています。とくに目立ったのは，ポリフォニー的なものの重視と，自国の作曲家による民族的色彩の濃い作品がふんだんに採り入れられていることの二点です。テクニック課題としては，スケール，アルペジオを各調で徹底して訓練していました。スケールは，反進行，3度，6度も含め，アルペジオは，Ⅰ，Ⅲ，Ⅴのすべての音からいろいろな形に分散させて，もちろん暗譜で弾かせていました。これは，低学年から50番チェルニーのランクに至るまで，要求度を高めて続けられていました。

ここでは，リムスキー＝コルサコフ記念音楽院のピアノ基礎教育の一端をご紹介しておきます。この学校は音楽の先生を養成する4年制の大学で，その下に5歳から10年間にわたる付属の小・中学校があり，一環した教育が行われています。恵まれているのは，付属小学校の生徒を実験台にして，ピアノ教育の研究を実地に行っていることです。指導にあたっている先生方は，毎週のように研究会を開いて問題点を話し合い，その解決に向けて全員が協力し合っているのです。また，大学の3，4年ではピアノ指導の教育実習も課され，最も大切な基礎教育を預かる若い卒業生が，未熟さゆえに犯す過ちを，最小限にとどめる配慮がなされており，うらやましく思われました。

入学した最初の1年はピアノを使わず，歌ったり，踊ったり，聴音やソルフェージュ，リトミックなどの授業をすることによる，音楽の土壌作りに力を入れています。そのうえ，基本的な手の形，読譜についても，ピアノを使わずにある程度解決していこうという姿勢を，強く感じました。この前段階の重要性は，実際にピアノに接してからの伸び具合からも明らかです。とくに音楽の生命ともいえるリズムに対する認識には，最も大切なこととして力を注いでいました。音程の確定したピアノにおい

ピオネール宮殿　子どもの課外活動の場で，授業終了後，自分の好きなことをして遊ぶ　後方の男性は先生 ▶



ては，リズムの正確な認識が読譜の際の音楽を理解する決め手となり，それがまた正しいピアノのタッチを習得するもととなるのです。子どもの教育に熱心な方は，このリズムの問題がいかにたいへんかよくご存知のはずで，それぞれ指導方法も工夫されていることと思いますが，ここでは，譜例のような言葉をつけて読むことから入っていました。拍子をとりながら，譜例に付された言葉で詩のようにメロディを歌い，音符，休符の理解を徹底させることに，非常な努力が払われています。これは単にソルフェージュにとどまらず，ピアノを弾くにあたっても最も大切なプロセスとなるのです。ピアノを弾くということは，このようにリズムを理解し，譜面をつねに音楽としてとらえてから，はじめて，鍵盤上ではどうなるのか，と考えていかなくてはならないのですから。

現在，一般に最も陥りやすいピアノを弾くうえでの誤りは，たたけば簡単に音の出る楽器という安易さから，どうしても弾くことが先に立ってしまう点です。つまり，音の響きに関して，あらかじめ耳から得た観念がないままに，譜面を読むことに慣れてしまう，ということなのです。子どもは，譜面と鍵盤に対する手の慣れだけでなんとなく弾いてしまい，譜面を音楽としてとらえず，鍵盤をたたいたあとで音を聴く，という結果になってしまっているのです。その結果，無責任な音，非音楽的な音の羅列となり，それを先生の手直しによって音楽にしていく，ということにレッスンの形態が終始していることが大きな弊害となっていることに，気がつかねばなりません。自分の弾く曲のイメージ，フレーズの理解なしに弾き出してはならないのです。音楽が心にあって，こういう音を弾こうと思うからこそ，よいタッチが生まれてくるのです。それがすなわち歌って弾くということであり，1音1音歌った音を出しているか否かチェックしていくことが，ピアノ指導の最も重要なポイントとなるのです。

最近は，アメリカのバスティン，トンプソンを筆頭にコダーイ・システムにのっとったハンガリーのもの，ソヴィエトの演奏基礎教本等，すぐれたテキストがたくさん出版されています。しかし，日本のピアノ教育はすべて個人レッスンによるため，とかく功を急ぎ，目先のうまさにとらわれてしまうのが現状です。そこにこそ，大きなマイナスがあるのではないでしょうか。日本の小さい子どもたちの巧さは外国人の驚嘆の的となっていますが，その先伸びが見られないことについて，私たちはもっと真剣に考えなければなりません。

いまでは4歳でのピアノ入門が常識となり，そうした「早すぎる教育」による弊害がかなり口にされるようになりましたが，それでもまだまだ一般には理解されず，土壌や環境の整っていない幼児の場合でも，早く弾くことに入ってしまいがちです。ソヴィエトの教育は底辺が厚く，ゆっくり時間をかけて土台作りをしているのです。ピアノに入る前段階もまた例外でなく，ピアノに入ってもただ単に進ませるだけでなく，頭での理解と感受性の養育にウェイトを置き，やさしい曲を美しく弾かせることに力を注いでいます。弾くことと同時に正しい読譜指導がつねに行われ，音楽の力を総合的に養っていこうとする配慮が，教育の端々に感じられました。

正しい土台を培っておけば，持って生まれた才能は時間とともに開花します。

「子どもはつぼではない，ローソクなのです。つめ込むのではなく，火をつけてあげることこそ大切なのです」

とのマリーナ先生の言葉が印象的でした。

5 第2回ソヴィエトピアノ基礎教育視察団帰国便り1

東京・調布ピアノ音楽研究所所長

松口雍子

世界中の国際音楽コンクール・ピアノ部門では，ソヴィエトがほとんどといってよいほど，上位を占める昨今です。1980年，24日間にわたるショパン・コンクールを第1次予選から本選までじっくり聴きましたが，1位から3位までがソヴィエト（6位に日本の海老彰子さん）という結果でした。また，昨年アメリカのジーナ・バッカウアー国際コンクールよりお招きを受け，行ってまいりましたが，この時も入賞6人中ふたりはソヴィエトの

◀モスクワ音楽院の前に立つ筆者

方で，そのうちのひとりは，世界中のどのコンクールでも通用する力を持っていました。

それでは，これだけ実力のある人を多く輩出しているソヴィエトのピアノ教育はどういうものなのか，その最も基礎的な段階からいかなる教育が施されているのか，その実態を学ぶべく，3月から4月にかけて，視察団の一員としてソヴィエトを訪れました。

視察した音楽学校は全部で5校，モスクワの中央音楽専門中等学校（コンセルヴァトーリア付属），グネシニフ名称国立音楽学校，第3芸術学校，レニングラードの第26音楽学校，リムスキー＝コルサコフ名称音楽学校です。以下に，その内容と私たちのために準備された演奏会（約40分位）の曲目，授業，個人レッスン，学校の特徴を列記してみましょう。なお，個人レッスン等は部屋の関係上，数人ずつに分かれて聴くことになりましたので，私自身が聴いたものには＊の印を冒頭に付しました。

中央音楽専門中等学校（コンセルヴァトーリア付属）/モスクワ

年齢／7～18歳（11年制）

生徒数／430名

学部／ピアノ，オーケストラ（ヴァイオリン，チェロ，ヴィオラ，コントラバス，吹奏楽器を含む），理論

ソヴィエト全土から，最良の生徒が集まる。今年は創立50周年にあたる。

演奏会（コンサートホール＝120席）

2年生（8歳・女）ピアノ――リスト／ノクターン

2年生（8歳・男）ヴァイオリン――バラキレフ／エクスプロムト　リニアフスキー／カプリース　付・ピアノ伴奏

6年生（12歳・男）チェロ――アサフィエフ／バフチサライの泉　他　付・ピアノ伴奏

3年生（10歳・男）ピアノ――シューマン／アラベスク

4年生（10歳・女）ピアノ――チャイコフスキー／秋の歌

5年生（11歳・男）ヴァイオリン――メンデルスゾーン／ヴァイオリン協奏曲第1，3楽章　付・ピアノ伴奏

10年生（17歳・男）フルート――ロンベルク／フルート協奏曲第1楽章　付・ピアノ伴奏

11年生（18歳・女）ピアノ――リスト／メフィスト・ワルツ

授　業（個人レッスン）

＊1年生（7歳・男）ピアノ――バッハの小品集

6年生（12歳・男）ピアノ

＊9年生（16歳・女）ピアノ
（16歳・女）ヴァイオリン
（16歳・女）チェロ
｝ブラームス／ピアノ三重奏曲

特　徴

ソヴィエト全土から最良の生徒が集まり，卒業生は全員，コンセルヴァトーリア（音楽院）に入学できる。この学校の生徒の目の輝き，自信を持った態度，演奏会での演奏技術と音楽性，いずれもさすがといえる。

グネシニフ名称国立音楽学校／モスクワ

年齢／16～30歳（4年制大学）

生徒数／840名（そのうち30名は外国人留学生，ピアノ学部は150名）

教師数／300名（そのうち100名は伴奏者）

学部／ピアノ，ヴァイオリン，声楽，コーラス，オペレッタ，音楽理論，軽音楽，吹奏楽

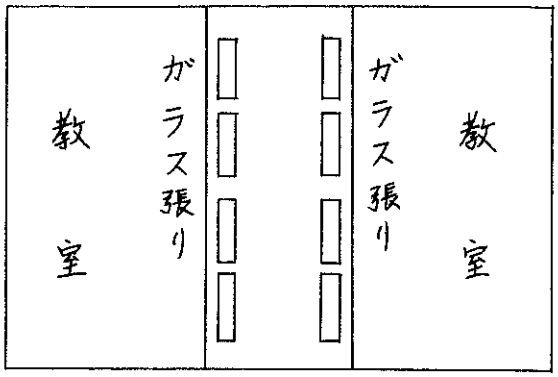
ソヴィエト最古の音楽学校のひとつで，90年祭を祝った。ちなみにモスクワには122の音楽学校がある。入学試験の競争率は11倍。演奏曲目は次のような曲から選ぶ。

モシュコフスキー，モシュレフ，チェルニーのエチュード

J. S. バッハ／インヴェンション，イギリス組曲，フランス組曲

ベートーヴェン／ピアノ・ソナタ　ハ長調，ピアノ

図1



・ソナタ第23番ヘ短調《熱情》，ショパン／エチュード変イ長調Op. 25－1

演奏試験は1月と6月に実施されるが，3，4年生が受ける曲目は，ショパン，リスト，ラフマニノフ，スクリアビン等。

演奏会（コンサートホール＝300席）

なし。40人位の生徒が，現在64歳の作曲家スビリドフの曲を練習中でした。

授　業（個人レッスン）

1年生の生徒による初歩のピアノ・レッスン

＊3年生の生徒による，ラフマニノフ／ピアノ協奏曲第4番第3楽章の練習（ヘデック・ナオムラ先生の教室）

＊3年生の生徒による，シューマン／ダヴィッド同盟舞曲集，ショパン／エチュードOp. 10-1，同《別れの曲》（ラザリーチ先生の教室）

特　徴

ピアノ部の卒業生は，15歳以下が入る中等音楽学校のピアノ教師となるのがふつうである。ソルフェージュ教室（レコーダー室と聴音室）では，16人の学生に120問の問題を出して筆記テストができる。ひとりひとりがインターホンで聴音練習も可能（図1参照）。中央コントロール室からは，先生が選んだ曲を100室の教室に流す。この日は9時から45分間モーツァルトを流したが，曲は古典から現代曲に至るまで，7000曲きかせる。

第3芸術学校／モスクワ

年齢／7～16歳（10年制）

生徒数／1000名（音楽500名，教師80名）

学部／音楽（クラシック音楽中心だが，民族楽器も含む），バレエ，芸術

創立7年。上記の3学部から構成されるこの形式の学校は新しく，現在研究中。

演奏会（コンサートホール＝450席）

2年生（8歳・男）アコーディオン――ヴァイヤンの曲

2年生（8歳・女）ピッコロ――ゲルトフスキー／ワ

▲グネシニフ名称国立音楽学校にて

▲第26音楽学校のリヒテル記念室にて

▲リムスキー＝コルサコフ名称国立音楽学校にてマリーナ教授と

▲第26音楽学校を見学する

ルツ　付・ピアノ伴奏

3年生（9歳・男）バラライカ――ロシア民謡，白ロシア民謡　付・ピアノ伴奏

4年生（10歳・男）ヴァイオリン――チャイコフスキーの作品　付・伴奏

8年生（15歳・女）ピアノ――タタールのブバールの曲

授　業（個人レッスン）

＊3年生（9歳・女）ピアノ――チェルニーをさまざまなパターンで全部暗譜，3度，アルペジオ，重音，スケール上行・下行・反進行（先生はギレリスの弟子）

特　徴

リヒテル記念室があり，リヒテルが訪れたり，リヒテルゆかりの品があったりする。音楽，バレエの試験に使用されるホール（図2参照）は，1階ホールがモザイクの壁画，2階ホールがフレスコの壁画，3階ホールが四季を描いたフレスコ壁画で彩られている。

第26音楽学校／レニングラード

年齢／6～14歳（7年制，希望者は夜間学校へ）

生徒数／750名（レニングラードで最大）

学部／ピアノ，ヴァイオリン，民族楽器，外国学器，コーラス，ドラマ

演奏会（コンサートホール＝540席）

1年生（6歳・男）チェロ

3年生（8歳・男）アコーディオン――チャイコフスキー／ナポリの歌　ウクライナ民謡

4年生（9歳・女）マンドリン――カマリジノフ／ロマンス

5年生（10歳・女）ピアノ
5年生（10歳・女）ヴァイオリン
4年生（9歳・女）チェロ
｝ハイドン／メヌエット

5年生（10歳・女）バラライカ――ヴォルガ河　私は蚊と一緒に踊った　付・ピアノ伴奏

7年生（12歳・女）ピアノ――スクリアビン／プレリュード第5番

7年生（12歳・男）シロフォン――ロッシーニ／ゼビリャの理髪師　付・ピアノ伴奏

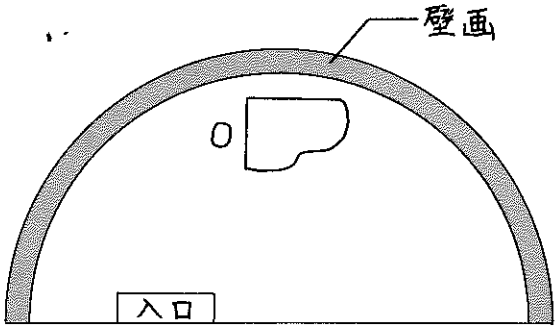
7年生（12歳・女）オルガン――バッハの作品2曲

授　業（個人レッスン）

チェロ・クラス（イリーナ・ニコラバ・ボグダノリチ先生＝チェリスト，ロストロポーヴィチの先生）

ピアノ・クラス――ショパン／序奏とロンド変ホ長調Op. 16　ノクターン（ニナ・ニコラエバ・ベルノワ先生）

図2



＊ピアノ・クラス――マンドリンにピアノ伴奏

＊ピアノ・クラス　6年生（12歳・男）――音階練習

＊聴音クラス合同授業　2年生（8歳・男女）約15名

特　徴

授業は週3～4回（個人レッスン＝2時間，音楽理論＝1時間，ソルフェージュ＝1時間半，コーラス＝1時間）。準備クラスとして，幼稚園児のグループがふたつ，5歳児グループ，6歳児グループがあり，リトミックから始めて，ソルフェージュの簡単なものを学ぶ。楽器は6歳から始める。教室50室を2交替で使う。

リムスキー＝コルサコフ名称音楽学校／レニングラード

年齢／5～17歳（4年制高学部と付属8年制低学部）

ソヴィエトの音楽学校は，上級校としてのコンセルヴァトーリア（音楽院），中級校としての音楽専門学校（コンセルヴァトーリアに入る，またはピアノ教師を養成する），下級校としてのふつうの音楽学校に分かれている。

演奏会

16歳（女，ネイガウスの弟子）――ショパン／バラード第4番ヘ短調Op. 52　ハイドン／ソナタ

授　業（個人レッスン）

＊8歳（男）――バッハ小品集より（マリーナ教授のレッスン）

＊8歳（女）――モーツァルト小品集（高等部学生による実習指導レッスン。学生がレッスンしているのを，マリーナ教授がうしろで聞くだけ）

＊初等教育の基礎運動についてのピアノなしの導入法についての話，質疑応答

特　徴

重要な目的のひとつは，良い先生を養成すること。教師のためのゼミナール，講義もあり，5年ごとに教師のための試験がある。卒業しても学校との関係を保ち，資質の向上を計るため，定期的に学校へ行くようになっている。例えば，2か月に1度卒業生のためのゼミがあったり，この学校の教師が卒業生の就職先に行って調査を

したり，若い卒業生のためのコンサートを催して教師が評価を下したり，といった具合である。実習として小学生部の生徒を教えさせ，教師として何を教えるかを学ばせる。他の実習に立ち会ってその後討論させたりもする。2年間はその実習をさせる。

おのおのの学校が私たちのために演奏会を用意してくださったこと，しかもそれがピアノだけでなく各種の楽器による演奏だったことは，上述のとおりでお分かりのことと思います。日本ならば，ピアノ指導者の視察となれば，ピアノの上手な小・中・高校生を出演させたのではないでしょうか。ソヴィエトでは，小さい時からいろいろな楽器の音楽を弾かせ，聴かせているのです。

次に授業ですが，これは学校側はわざわざ今回の視察団のために準備したりはしなかったのです。ふだんの授業でどのように教えられているかを見るのが，いちばんの目的であったため，各学校で直接ぜひ個人レッスン・授業を見せてくださるようお願いし，その希望がすべて受け入れられたことは，最大の収穫でした。はじめてのレッスン曲，仕上がっていないまだ途中の曲，練習中のエチュード，仕上げ段階の曲，とさまざまな段階，しかもさまざまな年齢のレッスンを聞くことができたのです。

各校に共通していちばん印象的だったのは，6歳で音楽学校に入った8歳位までの生徒，いわゆる初歩の生徒の教育が，経験豊富な50歳前後の先生たちに委ねられていることです。ソヴィエト最高の中央音楽学校では，創立当時から教鞭を執っておられるという偉いおばあちゃん先生（60歳位でしょうか）が，7歳の男の子にバッハの小品で，メロディの出し方をいろいろな方法で何回も繰り返し指導しておられたし，レニングラードでは，50歳近い男の先生が9歳の女の子に，チェルニーをさまざまなパターンでしかもすべて暗譜で弾かせ，指導しておられました。はじめてピアノを習う段階から数年間に，音楽の素晴らしさを身をもって知り，どのように音を出してどういうふうに歌わせたらよいのか，またそれに必要なテクニックはいかに指導したらよいのかといった，指導のつぼを心得た，いちばん音楽経験豊富な年代の先生の教えを受けているのです！　これからの日本のピアノ教育でいちばん再考を要するのは，この点ではないでしょうか。

残念ながら，こうしたことは学費が無料であるソヴィエトだからこそできるのだ，とも言えます。ですから，ほんとうに音楽をしたい生徒が集まり，優秀な生徒は奨学金を受け，またそのなかでもとくに優秀な生徒にはさらにその上の奨学金が出されます。日本では，小さい時から最高の先生につきたくとも，よほど経済的に恵まれた人でないかぎりそれは不可能ですし，一方，小さい生徒は教えないという先生も多いのではないでしょうか。

次に，ピアノ教師の養成に触れてみましょう。レニングラードでのマリーニン教授のように，8歳の生徒を音楽学生に指導させる実習は，2年間行われます。卒業後も2か月に1回学校のゼミを受け，教師の資質の向上を計るシステム，これもまたこれからの日本の音楽大学で採り入れてほしいことです（ほんの一部の人しか演奏家にはなれないのだから）。

最後に，中央音楽学校で全ソヴィエト・トリオ部門第1位となった，迫力ある素晴らしい演奏のリハーサルを聴いたときの感動は，今でも忘れることができません。

この帰国報告が，ピアノをご指導されている先生方の再考の一与になれば，幸いに存じます。

以上は，5人の先生から送られたレポートを編集したものである。新境著しいアメリカ，長い伝統を誇るオーストリア，コンクールで上位を独占する力を身につけたソヴィエト。いずれの国にも学ぶところは多いであろう。

紙面の都合により，「綾のピアノ日記」は休ませていただきます。

楽器のデパート
塚本楽器
（近江八幡支部のお世話をしております）
〒523 滋賀県近江八幡市堀上町145の6
TEL 07483(3)5198

ピアノ・エレクトーン・ステレオ
琴光堂楽器
（上田支部のお世話をしております）
〒386 上田市大手1丁目10番6号
TEL 0268(22)0551

こうのピアノ店
（北九州支部のお世話をしております）
〒803 北九州市小倉北区金田2-6-8
TEL 093(561)4007